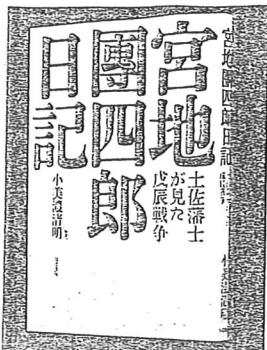


評・前田 英樹（批評家  
立教大教授）

土佐の郷士、宮地圓四郎は、慶応3年（1867年）11月21日から明治元年（1868年）11月1日までの一いだ、一日も欠かすことなく、克明な従軍日記をしたためている。

## 生々しい一級史料



右文書院  
2700円

郷里を発して、物情騒然の大坂、京に滞留し、藩の「御隠居様」山内容堂を警護して、御所で王政復古の政変に遭遇する。やがて、宣章の旗印のもと、鳥羽・伏見の戦いに出陣し、さらに奥州征伐を目指して、江戸、壬生、白河と転戦する。最後には、一本松の激戦を経て、会津若松城の包囲戦を制する。凱旋、帰郷して、藩主山内嵩範から戦功により「御留守居組」加入と四人扶持を許され、日記の言葉は「千秋萬歳等留る」で終わるが、時に圓四郎「年齢三十一歳」とある。

この宮地圓四郎、なかなかに筆が立つ、日記は日々の細部を活写して、

紀行文の味わいすら漂わせる。戦闘の実際を簡潔に記すといひでは、時に豪傑な情景が現われ、続いてすぐに戦闘中の楽しげな酒宴の報告があつたりする。湯屋と髪結いにはよく通い、二度の食事もほぼ欠かすことがない。名所旧跡にも殊勝に足を運び、世情の觀察も怠っていない。文を追いながら、まず感じるのは、この土佐郷士のしつかりとした教養であり、そこから育った明朗闊達な覚悟である。文中には、己ひとりの感想を語るところも、賢らな述懐もいつたりしない。潔いその自制が、眼前の光景を生き生きと浮かび上がらせる。人ひとりの命と直につながる歴史の生々しい臺きを伝えていく。

今回の出版で初めて陽の目を見たこの従軍日記は、疑いなく第一級の歴史資料である。が、また現代の歴史学が、こうした性質の文章の扱いをいかに不得手とし、文の生氣を味気ない事実解釈に還元してしまうか、それを想う。この種の本は、ほんとうに歴史を愛好する者の黙した精読を待っている。幕末史研究家、小美濃清明氏の細心な現代語訳と解説は、そのような精読を大いに助けるだろう。

△おみの・あよはるーー1943年生まれ。幕末史研究会主宰。著書に『坂本龍馬と刀剣』など。

[2014.5.18 讀賣新聞(日曜版)]